

◆ 誰がどのように・・・？

保全委員会や豊殿地区自治会連合会等が中心となり、ワークショップを5回開催。決定した詳細な整備方針に基づき基盤整備と併せて交流施設の整備を行い、農地の保全、地域活性化を推進

☆リレー栽培による規模拡大

菅平高原(標高1300m)と殿城地区(標高700m)の標高差を活かしたレタスのリレー栽培で生産規模を拡大し、販売高が約5,000万円増加

荒廃農地を再生し、担い手に集積

棚田百選に選定された当時、棚田全体の1/4が荒廃

中山間地域等直接支払交付金の活用 (H12～)

きっかけ

H11に棚田百選に認定されたことから、集落全体で「子どもの頃の棚田を取り戻したい」という想いが強まる

Step 1 (H12～)

棚田保全活動の開始

- 自治会が中心となった「稲倉の保全と活性化をすすめる会」を設立し復田に取り組む
- H15にJAや行政等の関連団体を統合し、現在の「稲倉の棚田保全委員会」を結成

Step 2 (H23～)

中山間地域総合整備事業の導入

- 農業用水の安定確保や、不足する高原レタスほ場を確保するための荒廃農地の再生と併せ、棚田保全のため交流施設の建設を事業化
- 殿城地区の将来ビジョンについて地域で話し合いを重ね、棚田百選の「稲倉の棚田」を拠点とした地域活性化を図ることを決定

Step 3 (H26～)

棚田保全の拠点施設の完成

- 「稲倉の里農村交流館」(交流施設基盤整備)が完成し、都市農村交流の拠点施設になる
- 多目的広場、駐車場の設置により、棚田オーナーを迎え入れやすい体制を整備

多面的機能支払交付金による維持活動

Step 4 (H27～)

新たな人材活力の注入～地域おこし協力隊員の配置～

- 上田市が、稲倉の棚田専任の地域おこし協力隊員を配置
- 隊員を中心に、ホームページやSNS、動画を活用した情報を積極的に発信
- 棚田CAMPなど、斬新なアイデアで様々な取組がスタート

Step 5 (R2～)

棚田地域振興協議会として新たな取組を模索・発展

- 稲倉の棚田地域振興協議会を設立
- 岡崎酒造(株)との棚田パートナーシップ協定を締結し、酒米オーナー制を拡大
- R2年度に中山間地域総合整備事業等でクライנגルテンを造成。滞在型の都市農村交流の拡大を期待

農作業体験学習受入れ人数の年間合計が500名を超える。(H29)

☆地域おこし協力隊を活用した地域活性化

基盤整備と交流施設の完成後、市が専任の地域おこし協力隊員を配置し、棚田での様々なイベントがスタートしたことで、さらなる地域活性化を推進

参加型イベントで収入を確保

参加型イベント「ししおどし」の試行実施



参加型イベント「棚田CAMP」



多目的広場(見晴台)



中山間地域総合整備事業で受入れ体制の条件整備

農村交流館



将来に向けて

- ☑ オーナー制、体験学習参加者の拡大
- ☑ 新たな参加型誘客イベントの開発・実施
- ☑ 活動に賛同する地域企業との連携拡大
- ☑ 保全活動継続のための収入源の確保

今後の展望

棚田地域振興緊急対策交付金で試行した取組を継続

- ほ場整備事業を実施し、富士山麓に大型農業機械が入れるひな壇状の棚田を整備。（「平成棚田」と命名）
- 棚田米を「白糸コシヒカリ」としてブランド化し、地区の総売上は倍増。
- 外部の力をうまく取り入れ、新たな取組を実施し、継続的に地区と関わりを持つ「関係人口」が増加中。

地区の特徴

中間地域

水稲

キーワード

高収益作物

6次産業化

集積・集約化

去人化

取組前

道水路未整備で狭小な田

しらと
白糸地区の稲作の状況（整備前）
【単価】 200円/kg
【単収】 300kg/10a

- 狭小な区画のため機械化が進まず荒廃農地化が進んでいた



狭小・不整形な整備前の田

地域を限定した住民活動

- 地域の結束力は強固だが、地域外の人との関わりは、それほど多くなかった
- イベントも少なく、交流人口は1,000人程度であった

取組内容

「平成棚田」の誕生

- 県営ほ場整備事業（S62～H17）による大型機械の導入

棚田米のブランド化

- 平成棚田で生産した米を「白糸コシヒカリ」としてブランド化



地域住民が活躍できる場を確保

- 地域の女性部が、そば処「富士山白糸庵」を開設



農地・農業水利施設の保全

- 多面的機能支払交付金（H19～）の活用により、非農家も巻き込んだ田の維持管理の共同活動に着手



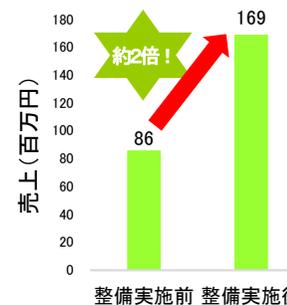
取組後

『白糸コシヒカリ』ブランド化により売上が倍増

白糸地区の稲作の状況（整備後）
【単価】 350円/kg
【単収】 420kg/10a

- 米のブランド化により、単価UPに成功（350円/kg、周辺地域の一般的な米250円/kg）し、売上が倍増！

＜米の売上の推移＞



継続的に地区と関わりを持つ関係人口が増加中

- 平成棚田で各種イベントを開催

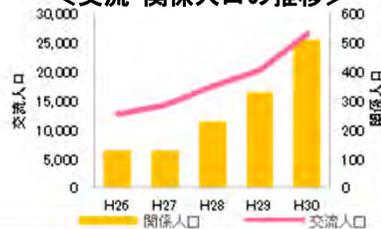
①地域住民が「平成棚田ノルディックウォーキングコース」を整備
平成27年に「新日本歩く道紀行100選」に選定



②クラウドファンディングを活用して開催した「富士山白糸平成棚田竹灯籠祭り」に県内外から約1万人が来場

- 観光客などの「交流人口」に加え、協働活動などで、継続的に地区と関わりを持つ「関係人口」は年々増加中！

＜交流・関係人口の推移＞





用水の水源となる原川を自然護岸で整備し、地域のシンボルに

住民の手で維持管理を行い、マス釣りなどのイベントで活用



◆ 誰がどのように・・・？

ほ場整備完了時に改良区が中心となり農作業受委託組合を設立したが、営農に加えて農地保全活動を行うため、多面的機能支払の活動組織を設立し農地、水路等の保全管理を実施

きっかけ

高齢化が進む中、面的整備が行われていない田の荒廃農地化を懸念

Step1 (S62~H17)

基盤整備の実施

- 県営ほ場整備事業により、富士山麓にひな壇状の棚田を整備
- 農業用排水施設、農道を整備

Step2 (H2~)

地域経済の活性化

- 水稻栽培終了後の水田で富士山の伏流水を使用した水かけ菜の栽培を開始
- そば処「富士山白糸庵」を食のおもてなし拠点として開設



Step3 (H19~)

地域ぐるみの活動

- 農業用施設の保全管理と活用を行う取組を地域ぐるみで開始
- 景観形成活動の実施
- 農村文化の伝承活動の実施

多面的機能支払交付金を活用

三椏和紙作りの復元

小学校・自治会と共に、三椏（みつまた）を使用した歴史ある和紙作りを復元



平成棚田 竹灯籠祭りの開催



H28~ 3,776本の竹灯籠で棚田を飾る祭り開催

☆整備された棚田の地域振興への活用

活動組織では整備後の農地を「平成棚田」と名付け、田植えイベントなどを開催し、地域のPRと米のブランド化を推進

将来に向けて

- ☑ 住民の結束と努力で築いた「平成棚田」を地域ぐるみで守り続けるとともに、農村交流の場として活用し、関係人口の更なる増加を目指す
- ☑ 関係人口の中から「地域協力隊」を組織し、より積極的に関わるファンを増やすとともに、最終的には地域への移住・定住者を増やす

今後の展望

Step5 (H27~)

関係人口増加の取組

- 地域のファンを増やすため、棚田において、竹灯籠祭り等の各種イベントや広報活動を精力的に実施
- これらの活動の資金調達にはクラウドファンディングを活用



地区外からの支援
★ココロネ(株)
★静岡県立大学環境サークルCO-CO

Step4 (H25~)

米のブランド化

- 整備した棚田を「平成棚田」と命名
- 富士山の湧水を使用した平成棚田で生産した棚田米『白糸こしひかり』をブランド化してPRし、単価UPに成功

- 耕作放棄地の拡大を食い止め、美しいふるさと（農村）維持のため、主産業である地域農業の基盤整備を実施。
- 基盤整備の効果により労働時間が削減されて創出された余剰時間を活用し、地域特産の大根等の生産・加工・販売、新たな園芸導入（らっきょう等）、棚田米ブランド化により農業販売額の増。
- 基盤整備で地域農業の持続性を高めた上で、更なる地域の魅力をイベント参加者や農家民宿の宿泊者へ情報発信。

地区の特徴

中間地域

水稻・野菜

キーワード

高収益作物

6次産業化

集積・集約化

法人化

取組前

耕作放棄地の拡大

【主要担い手】（農）雪太郎の郷
 【営農規模】A=5ha
 （米4ha、大根1ha）
 【販売額】約390万円（作業受託抜き）

○ 地域の状況
 等高線状に棚田が連なる山間丘陵地帯で、冬期間は3~4mの積雪を伴う豪雪地。また、日本有数の地すべり地帯に位置し農業生産条件の不利な中山間地域。

○ 地域の課題やその背景
 過疎化、高齢化による離農もあり、地域内に耕作放棄地が散在。地域の活性化が課題に。（事業前耕作放棄地1.5ha）

事業取り組み前の地域振興の取組

- H10頃～
 特産の大根関連イベント「雪太郎大根いっぺごとまつり」開始。
- H15全国初の「どぶろく特区」認定。農家民宿「ほほえみ荘」で製造販売を開始。
- H18年度 農事組合法人「雪太郎の郷」設立

取組内容

基盤整備による耕作放棄地解消

- ・ 県営農地環境整備事業（H23~R2）
 （農山漁村地域整備交付金）
 耕作放棄地が散在するエリアを区画整理し、生産区域と保安全管理区域に分けて整備。耕作放棄地を全て解消。

ほ場の生産性の向上と集積・集約化

- ・ 県営農地環境整備事業（H23~R2）
 （農山漁村地域整備交付金）
 事業を契機に整備後の農地を全て既存の農事組合法人に集積。（集積率100%）

地域の共同活動での管理体制確立

- ・ 中山間地域直接支払（H12~）
- ・ 多面的機能支払交付金（H26~）
 地域の共同活動として、道路、水路敷の草刈り等の維持管理を実施する体制を確立。

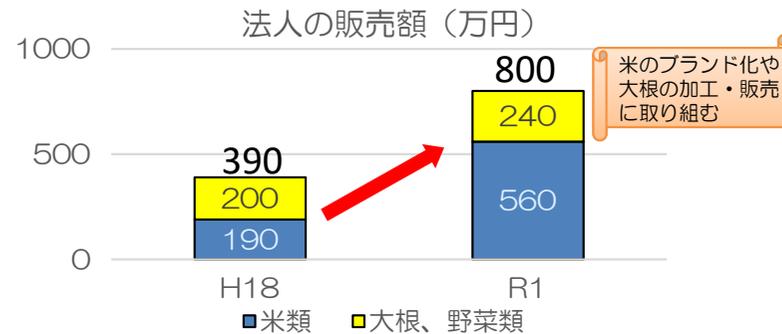
新たな園芸導入と米ブランド化

- ・ H28~地域産の米をブランド化「雪太郎の郷棚田米コシヒカリ」として直接販売。
- ・ H30~市農林水産業振興協議会（市、JA）において「らっきょう」の実証栽培開始。

取組後

農業経営の発展による法人販売額の増

【主要担い手】（農）雪太郎の郷
 【営農規模】A=13ha
 （米8.5ha、そば3ha、大根1.5ha、らっきょう0.1ha）
 【販売額】約800万円（作業受託抜き）



農業を基礎としたイベントや農泊者への地域の魅力発信



- ・ 農家民宿「ほほえみ荘」では、地場産食材による郷土料理と地域産のどぶろくでおもてなし。
- ・ 「雪太郎大根いっぺごとまつり」は昨年で22回目の開催。地域外から多くの人々が訪れ、地域の魅力発信と交流人口の増。（毎年約200名）



基盤整備事業実施



冬期間の大根収穫(11月)

平成19年1月「立ち上がる農山漁村」に選定。

耕作放棄地を解消し、区画拡大により営農効率アップ

◆ 誰がどのように・・・?

耕作放棄地の解消と区画整理による営農効率の向上を目指して法人が中心となって話し合いを重ね、基盤整備の計画検討。

きっかけ
過疎化、高齢化により地域内の耕作放棄地が増加。地域の主産業である農業の将来に危惧

Step 1 (H10~)

農村の活性化のための様々な取組
○ 宇津俣集落では、昭和63年に設立した農業生産組合を主体に地域特産の大根関連イベント「雪太郎大根いっぺごとまつり」開始。
○ 平成12年から農地の草刈り等の活動を中山間地域等直接支払の活動組織で活動開始。
○ 平成15年にどぶろく特区の認定を受け生産販売を開始し、農家民宿宿泊者や地域イベントで提供。

Step 2 (H18~)

地域農業の担い手として法人設立
○ 離農者等が増え、耕作放棄地が発生してきたことを背景に、農地の受け皿として法人を設立。
○ 地域特産の大根を加工販売する他、大根関連の商品開発を行い、法人の収益確保について模索。

Step 3 (H23~)

基盤整備事業実施
○ 県営農地環境整備事業（耕作放棄地緊急対策型）開始。
○ 耕作放棄地の解消、区画の拡大、用排水路、農道の整備を実施。

○大根関連イベントで関連商品をPR



☆法人女性部による地元農産物の商品開発

法人では女性部を中心に大根の加工販売商品を多数開発し、関東圏のスーパーへ出荷するなど収益力向上の取組を推進



関連商品
切り干し・たくわん・甘酢づけ・おでん用大根・だいこん餃子・大根ジャム

将来に向けて

- ☑ 「(農)雪太郎の郷」では、大根関連商品の生産販売の他、H30に実証栽培した「らっきょう」の生産販売を拡大し農業所得増の取組を推進。
- ☑ 法人では事業後継者を確保し、新たに定住した新規就農者とも業務連携して地域農業を支えるなど、新たな農業経営への展開を目指す。
- ☑ 基盤整備により地域農業の持続性を高め、農家民宿の宿泊者やイベント参加者へ地域の魅力を発信することで、リピーターを増やすべく美しいふるさと(農村)の振興を推進。

今後の展望

Step 5 (H28~)

地域ブランド米の開発 新たな園芸導入の検討
○ 平成28年から農業所得の向上のため、ブランド米「雪太郎の郷 棚田米コシヒカリ」開発。
○ 平成30年から市、JAと連携し新たな園芸作物として「らっきょう」の実証栽培を開始。

Step 4 (H26~)

維持管理体制の強化
○ 中山間地域の今後を見据え、単独集落だけでなく、近傍集落と連携した管理体制の確立を目指し、旧村単位の広域組織「牧区農地を守る会」を設立し、法人の営農を下支え。
○ 地域の共同施設(農地、道路、水路、ため池等)を管理する体制を強化。

多面的機能支払交付金を活用

地域資源保全
美しい農村
再工ネ等
水利施設
防災・減災力

- 屋敷林「カイニヨ」と伝統的家屋「アズマダチ」を中心とした散居景観の保全。
- 地域住民が散居景観の保全活動を支援する住民協定の締結。
- 都市住民との交流を促進するための拠点整備と各拠点間のネットワーク整備。

地区の特徴

平地・中山間地域

水稲・野菜

キーワード

高収益作物

6次産業化

集積・集約化

法人化

取組前

屋敷林・伝統家屋の維持が困難

- 核家族化による住環境の変化
- 生活スタイルの変化に伴う屋敷林への認識の変化
- 住居者の高齢化に伴う、屋敷林の維持管理（落ち葉拾い、枝打ち）への負担感の増大
- 伝統家屋を修繕できる職人の不足
- 家屋が大きく、維持管理がコスト高

散居村に対する地元の声

- 【屋敷林「カイニヨ」】
- 砺波平野の景観の素晴らしさを、保全活動を通じて、後世に残すべき
 - 所有者だけでなく、ボランティアなど地域全体で保全する体制整備が必要
 - （屋敷林が消えるのは、）時代の流れだから仕方がない
- 【伝統的家屋「アズマダチ」】
- 化学物質を含まない天然素材を多用しており健康に良い
 - 屋敷林と併せ、空気の流れを考慮した温度調整システムが成り立つ住居構造
 - 現代風の利点を取り入れて住みやすく改良すべき



取組内容

散居景観の整備・保全

- 田園空間整備事業（H10～17）
- 散居景観の維持を行う活動の中核施設、「散居村ミュージアム」の整備
 - 屋敷林の復元・整備、散策道の整備
 - 散居村展望場の整備



地域住民を巻き込んだ普及啓発

屋敷林を守る住民協定を締結
屋敷林の枝打ち講習会の実施(県単独事業)



食と農との融合による魅力の発信

地元の農産物と伝統的家屋に触れ合える
農家レストランの整備(県、市単独事業等)



取組後

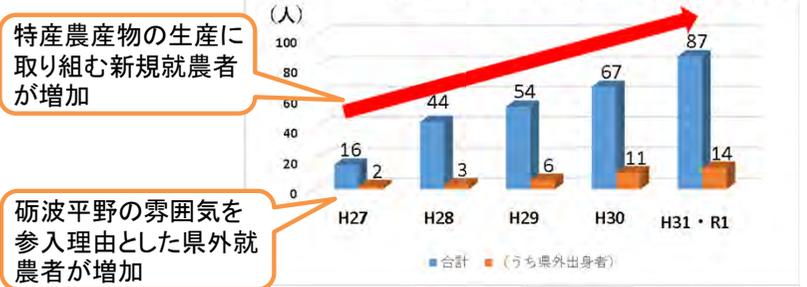
多様な地域資源の活用による地域の活性化

- 屋敷林を守る住民協定数の増加
- 散居景観を魅力に感じた県外からの移住者や新規就農者の増加
- 農家レストランを中心とした地産地消の推進
- 地元女性農家が中心となった、6次産業化への取組み
- 砺波平野の歴史や風土を学ぶ学習会等を開催

住民協定締結数(砺波市・南砺市)



新規就農者数(砺波市・南砺市、累計)



【散居村保全活動通じた伝統的な食材・料理の復活】

- 散居景観の保全活動を契機に伝統料理や昔ながらの生活様式に興味を持つ人が増加
- 農業に参入する人が増え、6次産業化に発展した取組みも見られる

